

大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

NO.81
2010.3

冬

特集

デジタルアーカイブの未来

学術的出版と図書館の責務

——ケンブリッジ大学図書館コレクションに寄せて

林望……………2

ネット時代の新たな挑戦

——Cambridge Library Collection が意味するもの

平野圭子……………7

デジタルアーカイブの動向と出版の役割

植村八潮……………12

電子化への移行期に本に期待すること

佐伯かおる……………17

●連載

初版本、ナンセンスなフェティシズム

横光利一著『機械』 酒井道夫……………表2

大学出版部ニュース……………22



一般社団法人大学出版部協会

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

初版本、ナンセンスなフェティシズム

横光利一著

『機械』

酒井道夫（武蔵野美術大学）



上が創元社版。廉価版とはいえ、丸背の曲線や束のおさまり具合はなかなか見事。

この二冊（白水社刊、一九三二／創元社刊、一九三五、装丁・佐野繁次郎）は、表題作の「機械」および「時間」「鞭」「鳥」「悪魔」を共に収録しているが、加えて白水社版には「高架線」「目に見えた風」「父母の真似」が載り、創元社版ではこれらを「馬車」「歴史」「薔薇」「書翰」「榛名」に替えている。横光は後者の「序」で「機械は以前に一度単行本として出したことがあるが、あまりに高価なためにもう一度廉価にしたい考へである」と述べているものの、作品の入れ替えについては何も断っていない。ちなみに前者が定価二元。後者が一円二〇銭。

近代文学館の特選名著復刻全集には白水社版が選ばれているので、創元社版の存在を知ったのは最近だ。これが不思議な中綴じ本。束が二センチもある分厚い週刊誌といった趣で、針金の代わりに麻紐で絡めてある（丸背？）。横光が言うところではこれで廉価版なわけだが、こんな綴じ方でも安価で売れたのだろうか？ 束をこの形状で安定させるのはそんなに容易ではないはず。しかも印刷時の面付けも難しそうだ。

大昔、安藤更生先生の机上で見かけた北原白秋の『邪宗門』がこれと同じ作りだったと記憶しているが、その後同書に遭遇する機会はなかった。当時、さすがに白秋はお洒落なんだと感心したのだが、実際の初版『邪宗門』はこれとは違った作りで謎がそのままになっていた。私は、時間と金を掛けて執念深く探せるほどの分際ではない。それが創元社版『機械』との邂逅で、珍種丸背の存在を確認できたのは意外だった。

創元社版は五号四分アキで組まれている。段落一字下げもしていない。このやり方は杉浦康平氏の創案になるものとはかり思っていたのだが、先例を発見。作品に見合った処理だと思うが、ドロドロの人間関係を巡る横光マンガクには正直辟易した。ここから時代相を読み取ったと思いたい、単に自分が歳を取ってアブラが抜けたというだけのことか。

特
集

デ
ジ
タ
ル
ア
ー
カ
イ
ブ
の
未
来

学術的出版と図書館の責務

ケンブリッジ大学図書館コレクションに寄せて

林 望 (作家・書誌学者)

近代の学制が敷かれてから、まだわずか百数十年しか経っていない我が国と比べて、ケンブリッジ大学は創立八百年、大学出版だけでも、創立四七五年だと聞いて、まったくこれでは立っている土俵が違うという思いが深い。そのケンブリッジ大学出版(CUP)が、創立四七五年を記念して、Cambridge Library Collection というデジタル出版を立ち上げるといふ。

私自身は、一九九一年に同社から『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録』(ピーター・コーニツキと共著)を刊行して以来の同社との付き合いだが、その目録の調査のために同図書館(CUL)にひたすら籠って仕事をしてきた時代のことは、まるで昨日のことに思い出される。

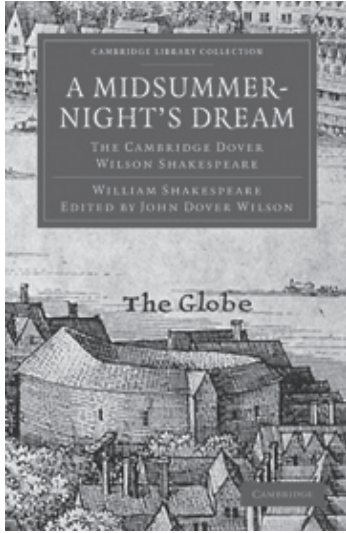
そこは、いわゆる汗牛充棟、世界中のあらゆる分野の名著稀籍がうんうんと唸っているところであった。この世界の叡知の殿堂ともいふべきCULに蓄えられた古今の学術

書のうち、一八〇〇年から一九二〇年までに刊行された名著をどんどんデジタル化して、もう一度誰でもが読めるように復刻しようという試みが、このたび同社がスタートしたケンブリッジ大学図書館コレクション(CLC)プロジェクトである。

昨年の一二月一日に、横浜で開催された「CUP出版四二五周年記念フォーラム」において、私は、同社代表のアンドリュー・ブラウン氏とともに、学術圖書の出版を巡る諸問題とこの度のCLCの取り組みについてディスカッションを行ったのであったが、そのプロジェクトの具体的な姿については、ブラウン氏から詳細な発表があったので、そちらに譲ることにして、私は、日本の学術圖書の出版を巡る問題点と、現在の図書館事情について、少しく愚見を述べたところであった。

さて、まずは、日本における学術出版の現状はどういうものだろうか。御多分にもれず、このところの不景気で、

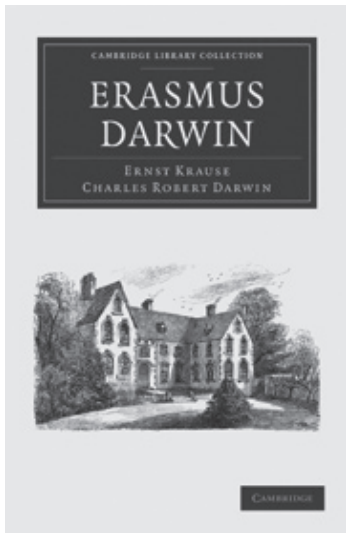
文化的なことに投じられる資金はますます減少し、出版界もその荒波に翻弄されつつあることは周知の通りである。しかし、そうなる前から、日本の学術出版は非常に困難であったことはたしかで、ありていに言えば、どんなに内容がすぐれていても、その出版となると営利事業としては成り立たない。出版は版組や紙代、製本コストなどの総和なるイニシャルコストを、印行部数で割って定価が求められる。しかるに、もともとと需要の少ない学術的な出版となると、せいぜい千部とか二千部とかしか作られない。そこで、一冊の値が一萬二万とすることも珍しくないのであった。それでも出せばいいほうで、実際には、発行部数の過半を著者が買い取るというようなことが多く、つまり学術出版はすればするほど著者が貧乏になっていくという哀しい現実がある。しかも、もとの部数が少ないために一度品切



れになってしまおうともう手に入れる術がない、ということもやむを得ない事情であった。

私が大学院の学生であったとき、折口信夫の高弟であった佐藤信彦教授にお教えを受けたが、その真っ先に諭されたことは、研究は方法が大切だということであった。すなわち、ある古典作品を研究する場合に、まず辞書的な取り調べをしたのち、当該の部分について、「先輩たちは何と言っているか」ということが大切だということである。言い換えると研究史をきちんと押さえることが求められるのだ。

ここにおいて、その研究史上の学術書が容易に入手できないということが、私ども研究者の頭痛の種であった。それでも、自分が大学に所属していればよい。大学図書館の文献を閲覧できるからである。しかし、一旦組織を離れた人間にとって、研究史を研究することは、叙上の意味で必



Cambridge Library Collection

要文献が容易に手に入らないという困難が立ちほだかる。とくに地方に住んでいるとなおさらである。幸運に当該の学術書が市場に出たとしても高価だから、そういうものを気楽に買えるほど研究者は裕福ではない。なにしろ高いものが多いのだ。

こうして研究者になると、研究のための購書に莫大な費用がかかり、粒々辛苦して著書を出版すると、こんどはその買い取りのためにますます貧乏になる、これが日本における学者の人生であった。

ケンブリッジ大学くらいになると、そもそも学者が大学のなかのロッジに無料で住んでいて、食事も支給され、文献はコレッジの図書館や大学図書館で自由に閲覧できる(しかもコレッジの図書館は多く二四時間開いている)、という途方もない特権を与えられているので、そういう思いをしなくても済む。なおかつ、また有意義な研究書は厳正なる審査を経て大学出版から刊行されるということになり、別に著書を出したからとて貧乏になる気遣いもない、これが世界のインテリジェンスの総本山ともいべきケンブリッジ大学等の実相である。日本の大学とは、その懐の深さにおいて、学術に対する尊崇の度合いにおいて、到底同日の論ではないのである。

そういうふうにして四世紀以上もの長きに亘って蓄積されてきた無数の学術書のなかから、不朽の価値あるものを選んで、これから年間三〇〇〇タイトルもの書物をデジタ

ル出版して行くというのだから、その壮大なる規模と、内容の広さ重さとに、心底脱帽せざるを得ない。しかもその価格は、頗るリーズナブルで、これなら学者の貧乏な懐をさらに傷めることもあるまいと思われる。

世上、グーグルなどが手当たり次第に書物をスキャンして電子的にリリースするというので問題になっているが、ことケンブリッジのCLCについて言えば、グーグルなどが引き起こしつつある問題点とは全く無縁で、およそ良いことづくめであると言って過言でない。

一九二〇年までの学術書となれば、著作権は既に消滅している。しかも、もし著者が希望すれば、著作権が存続している新しいものについても、その出版の価値ありと認められるものについては、CLCの書目に加えることも当然にありうるといふ。

私も学術に長いこと携わってきた人間にとつて、二十年三十年前に出版した学術的著書は、もちろんもう絶版で手に入らないし、市場でも高い値段になってしまつて、自分でも買うことができない。そもそも市場に出ることすら稀である、となると、もはや手に入れる方途はほぼ閉ざされていると見てよい。それが、CLCのような形で簡易な製本で安価に提供されると、読者ばかりか、著者にとつても、またとない朗報である。

日本では、書物には再販売価格維持制度という旧弊な制度がなお存続し、しかも図書は少数の流通配給会社の寡占

状態に置かれている。また書店というものは原則的に委託販売であって、たんなる「棚貸し」商売に過ぎないから、出版されて二ヶ月もすれば、もう店頭からは撤去されて出版社に返本されてしまう。そうなったら、もうこの本は二度と目の目を見ることなく、いわゆるデッドストックとなつて、出版社のお荷物と化する。しかも配給会社の寡占状態のなかで、一度デッドストックになった書物は、なかなか再び店頭に送られることもなく腐っていく、そういう現実もある。

しかもこれにまた、財務省は、平然として固定資産としての課税をしてのけるので、例えば東京大学出版会などのような、学術出版に特化した一部の専門的出版社を例外として、一般の出版社としては、少しでもコストリスクを回避するために、二年もすると、すべてのストックは断裁処分となり、どんなに心を込めて書かれた良書であろうとも、あわれ焼却場の灰と消える運命である。

これがイギリスのように、一定の条件のもとに課税対象

歴史としての「アメリカの世紀」

—自由・権力・統合—

紀平英作

20世紀はなぜ「アメリカの世紀」と呼ばれるのか、自由・権力・統合という三軸から、アメリカという現代国家の形成過程を描く。

四六判・定価3885円

古代メソポタミアの神話と儀礼

月本昭男

「歴史のはじまり」に紡ぎ出された神観念・宇宙像・死生観を探る。創成譚、死者供養と卜占の文書に読む、世界観の知られざる祖型とは。

A5判・定価7770円

フィリピンと対日戦犯裁判

—1945-1953年—

永井均

アジア・太平洋戦争をめぐる対日両国はどのように向き合ったのか、戦後日比関係の出発点となった対日戦犯裁判のプロセスをたどる。

A5判・定価11,550円

森林の持続可能性と国際貿易

島本美保子

森林の持続可能性を考えたとき林産物貿易はどうあるべきか、経済学の立場から理論的・実証的な分析を行い、具体的政策を提言する。

A5判・定価4410円



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋

[定価は消費税5%込み]

<http://www.iwanami.co.jp/>

からは外れ、また年に二回はディスカウントして販売することが容認される社会では、古い本も灰にならずに流通する方便があるが、日本はそうではない。

多くの書物を書いた著者として、また学術に携わる研究者として、こういう悲観すべき状況はなんとかしなくてはならぬと思うけれども、当面この状況は動くまい。

そこへまた、日本は図書館人の見識がひどく低下してしまっているという問題がある。すなわち、新刊書をさえ、多数部重複所蔵して、これを著作権などは一切お構いなく、ほとんど無料で貸し出してしまう、そして、出版社にも著者にも一銭の金も払わないという情けない「無料貸本所」状態となっているからである。住民サービスという美名のもとに、公立図書館ばかりか、大学図書館までも、こういう著作権侵害・文化破壊に手を貸している状況では、まず出版社は利益を失い、著者も疲弊していくであろう。せめて図書館は、すべて新刊時からたとえば半年くらいは館外貸し出しをしないと、購入時に一定の著作権使用

料を払うとか、あるいは重複所蔵は二冊までに法律で定めて、閲覧したい人は根気よく待ってもらうとか、そういうモラルを持った、なにかの手当てをしなくては、出版文化は急速に衰滅に赴く可能性すらある。

かかる状況のなかで、一度絶版になってしまった幾多の名著が、再び日の目を見ることができるかどうか、日本ではあまり希望が持てないけれど、それこそ、このCLCのような取り組みには、世界的に多くの期待がかかるころである。

ここに、私は、イギリスの図書館人、あるいは大学出版の「良心」と「底力」を見る。真に意義ある良書を、誰でも簡単に入手できるような形で再刊し、しかも、そのデータ化に当っては、能う限りの書誌的データを明記し、また撮影にも最新の機器を用いて熟練の技師が細心の注意を払って之を行い、細密な校正や、場合によっては修復さえ加えて、できる限り完全なものをリリースするという。こういう形で再び世に出て、後学を裨益することができるようになった著書とその著者は、どんなにか幸福なことである。

私は、さっそく、すでに品切れになっている『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録』のCLC再刊をブラウン氏に頼んだことであった。

ネット時代の新たな挑戦

Cambridge Library Collection が意味するもの

平野圭子（ケンブリッジ大学出版局）

はじめに

二〇〇九年はケンブリッジ大学出版局にとって記念すべき一年でした。ケンブリッジ大学の創立八〇〇周年、大学出版局の創立四七五周年かつ出版四二五周年を祝う年で、本社のある英国ケンブリッジの町をはじめ、世界各国のオフィスにおいて記念行事が行われました。日本では、Cambridge Library Collection（ケンブリッジ・ライブラリー・コレクション）の刊行開始を併せて記念し、一月に横浜パシフィコで開催された図書館総合展において、ブリス展示と出版四二五周年記念フォーラムを開催いたしました。フォーラムは題して『著作権問題が議論される中、今、出版社と図書館にできることは何か。絶版タイトル・著作権切れタイトルを再び出版へ Cambridge Library Collection——ケンブリッジ大学出版局とケンブリッジ大学図書館の新たな取組みについて、リンボウ先生と語る！』。

ケンブリッジ大学出版局学術専門書部門の最高責任者であるアンドリュース・ブラウンと作家・書誌学者の林望先生との対談を通して、今の出版業界に課せられた課題について様々な観点から議論が展開されました。ここでは、そのフォーラムで紹介したケンブリッジ・ライブラリー・コレクションの特長を整理し、ネット時代における学術図書出版の意味について考えたいと思います。

Cambridge Library Collection

ケンブリッジ・ライブラリー・コレクションは、ケンブリッジ大学出版局がケンブリッジ大学図書館^①と共同で進めているプロジェクトに基づくシリーズで、ケンブリッジ大学図書館所蔵のコレクションの中から希少価値、学術的価値の高い著作権の切れた書籍や、一九世紀～二〇世紀初頭にかけて様々な出版社から刊行された書籍を選び、最先端のスキヤニングとプリント・オン・デマンドの技術を使

い、過去に一部のみにしかアクセスできなかった書物を、手頃な価格のペーパーバック版で復刻するというコレクションです。出版局創立四七五周年を記念して二〇〇九年夏にまず四七五タイトルが刊行され、二〇〇九年の終わりに一〇〇〇タイトルを出版、今後は年間約三〇〇〇タイトルのペースで出版がされていきます。分野は、ケンブリッジ関連書、文学研究、言語学、音楽、宗教学、歴史学、印刷・出版の歴史、数学、物理学、生命科学と多岐に渡り、さらに今後は、考古学、古典学、哲学、テクノロジ、魔術と、出版分野が拡張されていく予定です。⁽²⁾

では、他のリプリント出版社も既に同じように名著の復刻を行っている中、なぜケンブリッジ大学出版局は、今、ケンブリッジ・ライブラリー・コレクションを出版するのでしょうか。また、グーグルは数百万もの著作権の切れた書籍をスキャンして、インターネット上に無料で掲載しています。ケンブリッジ・ライブラリー・コレクションはこれらと何が違うのでしょうか。その答えは①スキャンの精密さ、完全性、読みやすさ、②タイトルの学術的重要性、③書誌情報の正確性と信頼性、の三点にあります。

① スキャンの精密さ、完全性、読みやすさ 最初のポイントは、スキャンの品質にあります。一般的に古い書物をスキャンする場合、所蔵図書館のスタンブ、ページ上に書かれた読者によるコメントやメモ、年月や湿度によってページ上に生じた変色やその他の染みなどはそのまま再現さ

れ、読みにくさの原因になります。また、折り込みの地図やイラストが折り込まれたままの場合やイラストが薄葉紙のページで保護されている場合、本来の地図やイラストはスキャンされず、空白のページだけが再現されてしまいます。高速でスキャンの作業を行うと、一度に二〜三ページを捲ってしまい、その結果ページが抜けてしまうこともあります。現に、グーグルは、アメリカやイギリスの図書館に所蔵されている数百万の古い書籍をスキャンしています。それらはほとんど品質の管理がされていないのが現状です。実際にグーグルサイトでスキャンされた書籍を見ると、ページ上の地図の一部が消えていたり、文字がぼやけていたり、ページ自体が白紙になっているケースが見受けられます。その結果、グーグルスキャンで調べ物しようとしても、時には何の情報も得ることができない可能性があるので。また、他のリプリント出版社の商品では、同じページが複数ページに渡っているもの、ページが抜け落ちているものや読みづらいものが多く、さらには原書の巻数の半分だけがスキャンされているといったケースもあります。このような貧弱な品質のものは、高速でスキャンの作業を行うことを第一に考え、スキャンの結果を随時確認していない結果の現れです。これでは、せっかくの書物の価値も台無しです。

ケンブリッジ大学出版局は違います。折込みの地図やイラストも含む全ての書籍の全てのページについて、一〇〇

昭和

戦争と平和の日本

ダワー 「一億一心」のスローガンが隠した社会の無秩序と緊張とは？ 日米関係の基本性格とは？ 11編。明田川融監訳 ¥3990

資本主義の妖怪

金融危機と景気後退の政治学

ギャンブル イギリス政治学の泰斗が歴史・思想・国際関係から金融危機の全容を解明。経済再編成を展望。小笠原欣幸訳 ¥2940

地球の洞察

多文化時代の環境哲学

キャリコット 欧米と東洋の環境思想から、ポリネシア、アフリカ、オーストラリア先住民の自然観まで。山内・村上訳 ¥6930

ガリレオ

コペルニクス説のために、教会のために

ファントリ ガリレオ断罪からヨハネス・パウルス2世による《名誉回復》へ。史上最も有名な裁判の真相。須藤和夫訳 ¥12600

数学は最善世界の夢を見るか？

最小作用の原理から最適化理論へ
エクランド 解析力学の発展からガリレオの夢を実現する現代幾何学へ。最適化の科学を拓いた天才の探求。南條郁子訳 ¥3780

大隈重信関係文書

6
さの一すわ

三条実美 224通、渋沢栄一 75通はじめ、志賀重昂の書翰など100名・766通を収録。早稲田大学大史資料センター ¥10500

東京文京本郷 5丁目32-21 **みすず書房**
tel. 3814-0131 fax 3818-6435 (税込)
http://www.mszz.co.jp

② タイトルが持つ学術的重要性 二つ目のポイントは、個々のタイトルが持つ学術的重要性があります。書籍の重要性は、その時代や用途によって異なります。例えば、個人または図書館員が一九世紀の科学の本に興味をもった場合、おそらくダーウインの『種の起源』⁽³⁾など、その分野において大きな貢献を果たしたタイトルを選択するでしょう。

③ 書誌情報の正確性と信頼性 三つ目のポイントは、書誌情報の正確性と信頼性です。信頼できる書誌データは、書籍の見つけやすさ、読者の信頼レベル、研究トピックと

② 再現し、判読が可能であると保証しています。スキヤンを行う前に、その書籍が完全であることをまずチェックし、ページが抜けていないことを確かにするために、スキヤンの行程を全て監視しています。そしてスキヤンされた各ページは、一ページごとに細かい画像処理が施され、図書館のスタンブ、読者によるコメントやメモ、その他の落書き、汚れ、茶色く変色した部分、インクの染み等は完全に消去され、書物が刊行された際と同様に、読みやすい綺麗なページを蘇らせているのです。このようなプロセスを経て、ケンブリッジ・ライブラリー・コレクションは、高品質で正確かつ完全な形で復刻版を提供しています。

う。しかしながら、図書館向けのタイトルとして、ダーウイン程有名でなくても学術的に重要な書籍をどのように見つけ出し、選書すれば良いのでしょうか。一流の本であっても今の時代に通用するものなのか、それとも歴史の塵となるものなのか。それぞれの分野の専門家であれば正しい判断を下すのはおそらく難しいでしょう。図書館の所蔵に真の価値をもたらすには、正しい選書の判断が必要となります。ケンブリッジ・ライブラリー・コレクションは、ケンブリッジ大学図書館からランダムに選ばれたタイトルで構成されているのではなく、分野ごとの専門家により、現代の学生や学者にも参照されるべき書物や今日の研究にも関連すると思われる書物が一つ一つ選ばれています。従って、各分野に含まれるタイトルは、復刻を通して学術的に重要であることが保証されているのです。

のマッチングに直接関係します。ケンブリッジ・ライブラリー・コレクションでは、全てのタイトルについて、書籍のページ総数、地図・図版・イラスト等の数、版の数、出版年などの情報を確実に正確なものとして提供しています。また、一九世紀の書籍には、ブックカバーがありませんでした。そのため、解説文もありませんでした。そこで一冊一冊について書籍の内容に則したブックカバーがデザインされ、著者や書籍の内容についての情報や、何故その書籍が復刻される価値があるのか、何故その書籍が現代でも重要なのか等の解説文が新規に書かれています。それらの解説文はタイトルの裏表紙のみならず、グーグルのブックサーチャやケンブリッジのウェブサイト等にも掲載されており、それを以て読者は自分がほしい本なのか、買いたい本なのかを判断することができ、通常のケンブリッジの新刊と同じ方法でライブラリー・コレクションの書籍を入手することができるようになります。

ネット時代における書籍の役割

ネットで自由に情報検索ができるこの時代にケンブリッジ大学出版局はなぜここまで手間をかけてまで、紙媒体でケンブリッジ・ライブラリー・コレクションを出版するのでしょうか。実際、なぜライブラリー・コレクションを電子版で出版しないのかというご質問も多数頂いています。もちろん将来的には電子ブックの形態でも入手頂けるよう

にはなると思いますが、世界屈指の所蔵を誇るケンブリッジ大学図書館所蔵の書籍を復刻し、書籍として敢えて提供するのには、「教育、知識の向上と研究発展の促進」をミッションとする大学出版局として、知的財産としての学術圖書の価値を的確に評価し、その重要性を伝えるべく、正確でかつ完全な形で、世界の誰の手にも届くようにすることに意義があると考えます。

図書館総合展が開催された丁度一月に刊行された日本版ニューズウィーク誌(二〇〇九年一月一八日号)に『ネットは本を変えるのか』と題した記事が掲載されました。そこでは、ウェブ時代における新しい書籍の在り方を考えすべき時期に来ているという某洋書出版社の創業者の主張に対し、「無料の情報が増え続ける一方で、膨大な量の情報を評価できなくなりつつある今、情報の価値を知りたいという切望が募っている」とし、書籍を持つ価値を再認識する見解が述べられています。ケンブリッジ・ライブラリー・コレクションは、まさにこういった切望に応えることが出来ると考えます。グーグルスキャンで膨大な量の書籍を検索することはできますが、情報が多すぎてそれぞれの「コンテンツ」を持つ付加価値が過小評価される危険はないのでしょうか。学術的に重要な情報が掲載されているページが抜けていてもそれらは無いものとして扱われてしまう危険性すらあります。だからこそ、枠のないネットにただ膨大な量の情報を投じるのではなく、現代が必要とする

学術的情報を出版社の立場から見極め、過去の一冊の書物を現代の一冊の本として、本来の姿のまま復刻することに意味があるのです。

電子と紙の関係を考えた場合、必ずしも電子は紙に取って代わるものになるのではなく、相互関係を保ちながら共存できるものだと考えます。今、ケンブリッジ・ライブラリー・コレクションが提供するものは、ネットの時代に共存する書籍の姿です。どのような形態で情報が必要とするかを決めるのは、マーケティングであり、そこにある個人のニーズによります。ゲージルスキヤンの情報で十分と感じる人もいれば、それを全く役に立たない情報と考える人もいます。情報量の増大とともに多様化するマーケティングのニーズにどう応えていくか。今後の出版業界に求められるものは、著者、出版社、流通会社、図書館など、書籍と読者を繋げる役割を担う者同士が強いパートナーシップを築き、情報の価値を正しく評価した上で、その価値に見合った適切な情報提供の方法を検討していくことにあるのではないのでしょうか。

(1) ケンブリッジ大学図書館は、英国に六つある納本図書館の一つで約七〇〇万冊の所蔵を誇ります。「納本図書館」とは、法に定められている通り、英国において毎年出版される書籍について出版社が一冊ずつ納める義務を負う図書館を意味します。他の五つの図書館は、英国図書館（ロンドン）、ボードリアン図書館（オクスフォード）、国立スコットランド図書館（エジンバラ）、国立ウェ

ールズ図書館（アペリストウイス）、国立アイルランド図書館（ダブリン）になります。

(2) ケンブリッジ・ライブラリー・コレクションのホームページにおいて、刊行された書籍の詳細とともに、コレクション刊行までの一連のプロセスを説明したビデオをご覧頂けます。

www.cambridge.org/cic

(3) 『種の起源』の第六版がケンブリッジ・ライブラリー・コレクションで出版されています。

デジタルアーカイブの動向と出版の役割

植村八潮（東京電機大学出版局）

二〇〇九年になって、出版界でデジタルアーカイブに対する関心が、一気に高まる事態が続いて起きた。グーグルブック検索の訴訟和解と国立国会図書館のデジタルアーカイブ事業である。本稿では、デジタルアーカイブが出版界でどのような経緯で注目されたのか、その過程で浮かび上がってきた課題や出版社の役割について検討する。

注目された背景と経緯

本来、「デジタルアーカイブ」とは公文書館（アーカイブス）、図書館（ライブラリー）、博物館・美術館（ミュージアム）の収蔵品や文化資料などを、デジタル化して保存を行うことである。名前の通りデジタル技術の進歩によって可能となったシステムである。デジタル化することで貴重資料の利用回数を減らし、資料の保全や公開が可能となっている。

特に公開については、収集館内だけでなくインターネット

トによる館外への公開も試みられている。国立公文書館の「デジタルアーカイブ・システム」や国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」、民間では日本放送協会の「NHKアーカイブス」がよく知られている。

文化資料の保全を目的としたデジタルアーカイブの開発は、九〇年代後半から始まっている。注目されるようになったのは二〇〇〇年代になってからである。これは技術の進歩もさることながら、コンテンツ産業の国際競争力育成や海外に向けた日本文化発信による国際理解向上を掲げた「eJapan戦略」によるところが大きい。この頃からアーカイブの構築が、文化保全だけでなく産業振興を目的とし始めたといってもよいだろう。この延長上に、グーグル問題や国会図書館アーカイブをとらえておきたい。

グーグルブック検索の顛末

米国グーグルのブック検索プロジェクトは、〇三年に出

宮本常一著作集
別集

私の
日本地図

(全15巻)

宮本常一 著
香月洋一郎 編

写真とそれぞれの旅での印象を書きとめた文章を半々に配してまとめた列島紀行『私の日本地図』。1967年から76年に刊行された全15巻を順次復刻刊行中。さまざまな景観・事物・光景・人びとの姿を撮った写真にその地域・地方に展開した歴史をかさね、そこを生活の場としてきた人々の人生に思いを寄せてつづる記述は、宮本常一の旅のまなざしと心のありかをよく表している。

* 好評既刊 *

7 佐渡

9 瀬戸内海III
周防大島

10 武蔵野・青梅

14 京都 **最新刊**

15 壱岐・対馬紀行
各2310円

〈以下続刊〉

1 天竜川に沿って / 2 上高地付近 / 3 下北半島 / 4 瀬戸内海I 広島湾付近 / 5 五島列島 / 6 瀬戸内海II 芸予の海 / 8 沖繩 / 11 阿蘇・球磨 / 12 瀬戸内海IV 備讃の瀬戸付近 / 13 萩付近

未来社 〒112-0002

東京都文京区小石川3-7-2

tel 03-3814-5521

http://www.miraisha.co.jp/

★出版図書目録無料進呈いたします★

※価格は税込

出版社のマーケティングプロジェクトとして開始した。しかし、〇四年になってミシガン大学図書館などと提携して、その蔵書をスキャンすることで書籍検索・表示への利用を開始した。この図書館プロジェクトに対して、まっ先に米国大学出版部協会が公開質問状により懸念を表明し、続いて米国の作家組合と主要出版社が著作権侵害訴訟を起こした。

両者は〇八年秋に和解合意に達した。詳細は省くが、この和解案が世界中の著作権者に影響を与えることになった。グーグルがデータ化した書籍総数は、この時点で七百万冊以上と発表されている。多様な流通手段によって、多様な表現物に対し、誰でもが自由にアクセスできること。出版界と図書館は〈表現の自由〉と〈知る権利〉を支える重要な役割を今日まで担ってきた。しかし、今回の和解案は、一私企業による情報流通の独占を可能にする危険がある。

和解案に対し強い異議申立が世界中からわき起こった。

この結果、〇九年一月に和解修正案が提出され、和解対象が英語圏の出版物に限定された。これによって、ほぼ日本の出版物への影響はなくなったといえる。しかし、米政府は連邦裁判所に対して、根本的な問題が解決されていないとして、本年二月の時点での和解修正案の承認を拒否することを推薦している。事態は混沌としており、大げさではなく世界中の出版社は固唾をのんで和解案の行方を見つめている。

インターネットで世界中の書籍を検索できるようにする――。グーグルが掲げた目標が実現すれば、図書館の閉架書庫で埃をかぶったままの図書も、出版目録からはずされたままの絶版本もよみがえることになる。書籍の全文検索が可能になれば、もはや文献調査のために書棚の前に立つて片端から閲覧する必要はなく、論文の引用リストを手がかりに文献を探索する作業は過去のものになるだろう。

和解案の是非は別として、ユーザー利便性の点から評価すれば、グーグルブック検索は疑いもなくすばらしいサー

ビスである。その恩恵を受けられるのであれば無料提供である必要はない。従来のリファレンスデータベースや電子書籍の配信ビジネス同様に、個人向けには有料サービスとし、図書館とは有料契約を結んで来館者に提供すればよい。

国立国会図書館のデジタルアーカイブ事業

一方、国会図書館では、従来から明治・大正期の図書十四万八千冊をデジタル化し「近代デジタルライブラリー」として公開してきた。しかし、このデジタル化作業は予算の問題を別としても、なかなか進まなかった。戦前の図書のため著作権者を探しだして許諾をとることが困難だからである。そこで著作権法と国立国会図書館法が改正され、本年一月一日からの法施行により許諾作業が不要となった。この法的整備を背景に、約百二十七億円が補正予算に計上され、日本版デジタルアーカイブ構築が本格化したのだ。

国会図書館のプロジェクトを日の丸デジタルアーカイブに一気に押し上げたのが、長尾真国立国会図書館長による「長尾構想」である。国会図書館のデジタルアーカイブをもとにして、出版コンテンツの流通インフラづくりをめざす、というものである。

当初は、出版界から強い反発があった。しかし、グーグルの和解騒動が起ることで「出版コンテンツが米国私企業にとられることは国益に反する」といったナシヨナリズム

ム的機運が高まり、急速に日本の出版文化を守る「長尾構想」という図式にすり替わったのである。

「古い酒を新しい革袋」に入れるデジタルアーカイブ

著作権の円滑な流通をめざす目的はよいとしても、デジタルアーカイブは、従来、出版社が印刷メディアによって果たしてきた役割の何を代替するのだろうか。

出版活動は、印刷による複製技術と物流による頒布を基盤としている。そして情報の「生産」・「流通」・「販売」サイクルの一つとして、生産加工を行っている。この活動は、読者が対価を投資するのに見合った作品とするために、情報の選択や編集を行い、信頼性を高める作業である。

一方、デジタルアーカイブは、その名のとおり「蓄積・保存」を基本としており、理論的には誰でもがアクセス可能である。グーグルブック検索のようなサービスを行えばネット上の「流通」を担うこともできる。今回の改正で国立国会図書館では、著作権のある電子図書資料については、当然のことながら検索・閲覧が館内利用に限定されている。しかし、ネットで流通できる電子書籍である以上、館外からの貸出サービスを求める声も上がっている。

現にITによる先進的な国家運営をめざす韓国では、公共図書館がネットを利用した館外貸出を行っている。すでに日本でも韓国IT企業の技術を導入して、区立千代田図書館（東京）が同様なサービスを行って話題となった。

もちろん、それでは著者の知的生産活動や出版産業が成り立たなくなる。つまり、図書館活動の延長上にあるデジタルアーカイブは、運用次第でネットを利用した「無料の流通」システムとなるのである。

デジタルアーカイブを構築することで、既存の出版産業が衰退してしまつては元も子もない。公共図書館が無料貸本屋化しているという批判は、実態はともかく、出版界から繰り返し指摘されてきている。その上、国民サービスの点からインターネットでも図書館の蔵書が無料で読めるようにする、といった意見が官民から飛び出しかねない。本は無料で読むという風潮が広まるのが懸念されるのだ。

長尾真館長はネット上の館外貸出については、積極的に有料化を提言している。確かにレンタルCDビジネスが民間の競争で市場形成されてきたことを考えれば、ネット上の図書貸出についても、民間による有料サービスとして検討するべきである。公共図書館界からは反論も聞こえてくるが、「無料原則」に拘泥する根拠はない。

一方、国会図書館のデジタルアーカイブ計画では、現行法下では本文検索ができないことになっている。せつかく、お金をかけてデジタル化するというのに、書籍を手にして開いたほうが便利なことになりかねない。保存のためや貸出業務簡略化のためのアーカイブであれば、グループブック検索に対抗できる訳がない。本文検索を可能とする法改正のためには、図書館と権利者の合意形成が求められる。

著作権者や出版社は積極的な支持をすべきだろう。

ただし、新たな情報の生成は出版システムに依存したままであり、販売については未整備のままである。結局のところ、グループブック検索も国会図書館のデジタルアーカイブも既刊書の再流通システムに過ぎない。書籍をスキヤンしデジタル化したとしても、その内容も伝えるメッセージも印刷メディアを越えることはない。単に利便性が向上しただけである。

書籍の紙面をスキヤニングしただけのデジタルコンテンツでは、〈古い酒〉のままである。それをデジタルアーカイブという〈新しい革袋〉に入れただけともいえる。〈古い酒〉を〈新しい酒〉にしていく方法として、先に述べた本文検索機能の追加や、さまざまなディスプレイに対応したデジタル組版の実現が求められる。

では、〈酒〉であることの本質——つまり、印刷書籍であろうと、デジタル化された書籍であろうとも、変わることはない書籍の本質的な価値とは何だろうか。それこそが出版社が書籍編集の過程で作らだした「信頼性」ではないだろうか。

書籍の「信頼性」を生み出す出版の役割

大学出版部や学術団体は、モノグラフ出版や論文のレフエリーをとおして学術情報としての信頼性を付与してきた。とくに大学出版部にとって重要な作業は、原稿を入手

する前の段階にこそある。編集者は研究者に出会い、書籍の企画をし、執筆活動に伴走して、情報価値の誕生に立ち会うのである。

インターネットがあれば、著者が読者に本の内容を直接、配布できるとするのは幻想にすぎない。少なくとも学術専門書や教科書であれば、印刷物であろうとデジタルコンテンツであろうと、編集者の役割は不可欠である。内容を洗練し、読者の必要性にそって編集する役割が出版社には変わらず求められている。

一方、図書館の役割は、信頼性のある書籍を選書により選別することから始まり、体系的に分類し蓄積することにある。概して図書館サイドは、選書に価値を置きすぎる嫌いがあり、書籍が出版社によって信頼性が付与されているという事実認識が低い気がする。一例としてあげると機関リポジトリを「出版社に代わる情報発信機関」とする発言がある。情報発信機関であることは否定しないが、出版社に代わることはあり得ない。機関リポジトリが情報の生成や信頼性付与を行うことがないからだ。このような発言は、書き上げられたばかりの原稿と書籍の間にどれほどの作業があるか、原稿を集めることにどれほどの苦労があるか、認識していないからであるのだ。

機関リポジトリには、当初予定したようにはコンテンツが集まらないとも聞く。また、集めてくるには大学の研究室を頻繁に訪問しなくてはならないとも言う。それこそ、

図書館員に編集者のセンスが求められているからであり、いっそのこと、機関リポジトリの運営を大学出版部に移管したらどうだろうか。

機関リポジトリやネット上のコンテンツに対して、書籍の優位性を担保しているのが「信頼性」といってよいだろう。そして、いまだ書籍の信頼性が高いことを実証しているのが、皮肉にもグーグルブック検索である。

グーグルはなぜ検索対象として書籍を選んだのか。それも図書館の蔵書なのか。それは書籍こそもっとも信頼される情報であり、さらに図書館によって選ばれた情報だからである。我々の読書慣習は想像以上に保守的である。ウェブの検索結果が、ブログの記述か印刷書籍の紙面であるならば、多くの人が後者を信頼するだろう。まして大学図書館に蔵書されている書籍ならば、その信頼性は、出版社ブランドと大学ブランドによって二重に保障されたことになる。グーグルは検索結果について書籍の内容を担保することで自らの検索価値を高めている。デジタル革命の寵児ともいえるグーグルは、印刷書籍の持つ信頼性を高く評価しているのである。

将来、デジタルアーカイブが知の新たな流通基盤となつたとき、新しいデジタルコンテンツ——〈新しい酒〉が生み出されることだろう。当面のデジタルアーカイブの役割は、既刊書という〈古い酒〉を蘇らせて活用することであり、今後とも〈酒〉を作り続けるのは出版の役割である。

電子化への移行期に本に期待すること

佐伯かおる (京都大学学術出版会)

本のかたちに大きな変化が押し寄せようとしている。昨年二〇〇九年のアマゾン・キンドルや、今年に入っただけにはアップル・iPADの登場によって、電子的なデバイスで読書ができる環境がようやく整備され、電子本が我々の手元にもやってくるのがほぼ確実になったといえる。そのことに対する不安と期待は高まっているものの、まだ電子的な本を購入して読む体験も実際にはしていないし、自分の仕事として電子本を編集するという状況にもまだ至っていない。

本や出版をめぐる状況がどのような形に変わろうとも、人が考えを文章に綴って他の人たちに伝えるという行為が消えてなくなるわけではないし、むしろ、今以上に多くの人が書き手となり、出版という営みがいつそう盛んになっていく可能性も大いにある。

この移行期を迎えるにあたって、まだ具体的な姿をはっきりとはつかめていないものの、いずれ本格的に到来する

本の電子化をめぐる、日ごろ経験したいくつかの出来事を通じて漠然と抱いていた憶測や期待、その世界へ参入するにあたって目指すところを、この機会にまとめてみる。

書く形態にふさわしい読む形態をみつけること

まずは、本に記される文章そのものが書かれるときのことを考える。

編集の仕事の場において著者から頂く原稿も、今ではほぼすべてがPCで書かれたファイルの状態が届く。そんななかで最近めずらしく原稿用紙に丁寧に書きされた原稿をもらった。手書き原稿なんて久しぶり、と読んでみると、文章のリズム感が心地いい。著者が口に出して読んだときにも心地よいように、考えて書いてくれた文章だということがはっきり伝わってくる。しかしいっぽうで、名調子の文章、それが日ごろ目にするものではないことに、はっとさせられた。つまり、いま筆者が日常的に読んで文章

の多くはそうではないということだ。

この変化はいつのまに起こったのだろうか。団塊ジュニア世代の筆者が子供のころはまだ文章は紙に鉛筆で書くものと決まっていた。学校では鉛筆でノートをとり、作文は原稿用紙に書いてパンチで穴を開け、黒い紐で綴じていた世代である。大学に入ってからがちょうどワープロ専用機の全盛期で、このころになってレポートなどの文章を電子的なデバイスを使って書くことをしはじめた。

書く段階における電子化は十数年前に起こり、すでに当たり前の環境になってしまっている。その時期に書き手の内部でどのような変化があったか。原稿用紙のます目を一文字一文字埋めていく作業にはどうしても時間がかかるし、一度書いた文章の直しは気軽にできない。なので自ずと頭の中で文章を練り、口の中で調子を整えてから、慎重に言葉を選んでゆっくり少しずつ紙に文字を落としていったのではなかったか。

それが、キーボードから文章を入力するようになると、そうはならない。一度覚えてしまえば、手で紙に書くよりもずっと速く、次々と言葉を入力していける。あらかじめよく考えた末に文章を書くのではなく、頭の中にある思いつきをまずは次々と書き出してしまっただけで、ざっとアウトラインを作ってから、それを後から並べ変えたり肉付けして整理していくという書き方になった。

文章を書くための道具が変わったこの時点で、書かれる

文章そのものも質的に変化したはずである。このようにして速く入力した文章は、同じ内容を記すにしても文字数が増え、密度が薄くなる。薄い文章ならさっと読める。書くスピードだけでなく、読まれるスピードも速いのである。そして、おそらく消費されるスピードも速い。そんなふうにならざるを得ない文章をわれわれは繰り返し読んで何度も読む必要がないからである。何度も読み返される文章は、たぶん木や石に刻みつけられたり、紙に筆で書かれたような文章だ。

こう書いていると、手で紙に書かれなくなった現在の文章をまるきり否定しているようだが、それは筆者の本意ではない。現在、キーボードからすばやく入力されて書かれた文章は、これまたPC上での原稿整理や編集を経て、DTPによる組版に回り、刷版となる直前までは電子的データの形をしているにもかかわらず、最終段階では紙に印刷されて本の形になる。これがその文章にとって必ずしも最適な形態ではないだろう、と考えているのである。さっと書かれてさっと読まれる文章にこそふさわしい形を追求したい。

例えばネット上での議論のように、一回一回のストロークにおいては「薄さ」を持つている文章だとしても、書き手と読み手の双方向の頻回の対話を可能にし、その対話を積み重ねる共同作業によって次第にある思考を作り上げていくことを可能にしたら、その形を模索するこ

とこそを、これからのわれわれの目標としたい。

本と本のつながりを可視化すること

さて、また別の著者と雑談していたときにはこんな話を聞いた。

「僕は、自分の受け持っている学生にはこう言うんですよ。本が増えて置き場所がなくなっても、たとえばそれを箱の中に入れてしまえばいいからといって。かならず外に出して本棚に並べて、背だけでもいいからつねに視界に入るようにしておきなさい、と。もし中身を読んでなくても、自分はこの本を持っているんだという意識があれば、それだけでも書く論文が違ってくるんですよ」。

ちょうど引越しの直後で、文庫判、新書判、四六判の本がびったり収納できるサイズの段ボール箱を購入して、そこに自分の本を収納したら家の中がとてもしつかりした、という話をしたところだったので、大いに恐縮して拝聴したのを覚えている。本の背中をながめていけばいい論文が

書けるなんて本当かな、と思わないでもないけれど、ただ、本の背の文字をながめているだけでも、書棚に並んでいる本同士の手ながりや、自分がどのような関心からその本を手に入れたかという文脈を意識させられるというのは理解できる。

もしこれらの本の多くが電子化されて、何らかのブックリーダーに収めることができたなら、どうなるのだろうか。ちょうど、持っているCDの中身をすべてiTuneに移したときのように、持っている音楽がすべてこの中に入っているように、いつでも聴くことができるんだという所有感や喜びを、本でも同じように感じられるのだろうか。

さらに読者としての立場から言えば、自分の蔵書という狭い範囲だけではなくて、世界中の本をおさめた図書館全体を自分の手で閲覧できるようになったら、どんなにいいだろう。これを目指したグーグル・ブック検索が物議をかもしている。実際にどのような形をとるかについては議論の余地が多々あるとはいえ、これはやはり人類の夢で

ピューリッツァー賞受賞の話題書!!

サマンサ・パワー著 星野尚美訳 ●平和維持活動の現実と市民の役割 新たな集団人間破壊の発生を防止するための方策を示す。 5040円

紛争解決の国際政治学

J・ルイスほか編著 ●ユーロ・グローバルリズムか 5の示唆 4725円

オバマ大統領はどう立ち向かうのか アメリカの外交政策

信田智人編著 ●歴史・テクニカル・メカニズム 外交・安全保障政策の決定過程のメカニズム、分野別の外交政策という全体像に迫る。 3675円

大統領任命の政治学

D・ルイス著 稲継裕昭監訳 浅尾久美子訳 ●政治任用の実態と行政への影響 4725円

講座・日本経営史

各6000円

① 経営史・江戸の経験

宮本又郎／粕谷誠編著 ●1600～1882 日本企業の経営の歴史的遺産を検討する。

② 産業革命と企業経営

阿部武司／中村尚史編著 ●1882～1914 世紀転換期における企業の内部構造に迫る。

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL 075-581-0296 FAX 075-581-0589
価格税込 <http://www.minervashobo.co.jp/>

もあるだろう。図書館の本がいつでも参照できて、自分が書いた文章の中に引用した箇所から、これらさまざまな書物のテキスト本体へ直接リンクを張ることができたら、そして、これらの本が書かれてから現在までにそこから影響を受けて書かれた他の数多の著作、その中で引用箇所へのリンクも張られて、その関係が一目で見渡せるようになる、と思う。

いまの紙の本であっても、注や参考文献のリストにあげられた他の本の名前から、本同士の影響関係を一つ一つ追いか、議論の全体像をつかんでいくことは、できなくはない。だが、もし一目瞭然な形でつながりを見渡せて、たとえば糸を手練り寄せるような簡単な動作ひとつで関連する他の本を引っ張り出してくることが可能になるとしたら、そのとき本を読む人、書く人にいったいどれだけの変化がもたらされるだろうか。

本の電子化が進んでいくなら、このように本と本との間にあるむすびつきを、よく見える形にしたい。そのときに、時代を通じて多くの本へとむすびついて影響をあたえた過去の本は自動的に見出されることになる。それが古典と呼ばれる本である。

紙の本の魅力に挑戦してみる

電子化、パブリックドメイン、古典、とくれば、やはり「青空文庫」に触れたい。

「インターネットを利用して作った無料公開の電子図書館」として、一九九七年二月にスタートしたというから、インターネットの世界では相当な古株である。現在ではボランティアの手によって入力された九〇〇〇件近い作品が登録されている。登録作品は、著者の没後五〇年を経過して著作権が消滅したものが中心である。夏目漱石や芥川龍之介といった有名作家の作品を多数読むことができる。

この、いままら紹介するまでもないほどよく知られている青空文庫について、記憶に残る出来事がある。二〇〇八年の「蟹工船ブーム」時には、小林多喜二『蟹工船・党生活者』（新潮文庫）がその年の前半期だけで四〇万部を増刷したという。時流を巧みにつかんだ担当者手腕にも驚くが、ただ、蟹工船ブームが起ころる前から青空文庫にはこの小説の全文が掲載されていた。それなのに、わざわざお金を出して文庫本を買う人がそれほどいたということである。

ちなみに、青空文庫のサイトにある「アクセスランキング」を見ると、蟹工船ブームの翌年二〇〇九年でも、八万六〇〇〇件以上のアクセス数がありランキング第五位となっている。残念ながらブーム当時二〇〇八年のアクセス数は掲載されていないのでわからないが、これよりさらに多かつたろう。青空文庫でチェックして本を買わなかった人もこの中に多くいるだろう（筆者もその一人です）が、いっぽうであえて紙の本を買いに行った人も大勢いたことに、

あらためて驚きを感じた。出かける必要すらなく家のPCからちよこつと検索をかければ読めてしまうものを、どうしてまた、と。はたまた、紙の本にはやはり限らない魅力があるということなのだろうか。このあたりにまだよくわからない謎があるようにみえる。この魅力(?)を、電子化にあたって十分に研究し、受け継ぐようにしたい。

本の電子化、古典、パブリックドメインなどの問題に関して、それらを至極大ざっぱな形ではあるが筆者自身が付けた事柄をきっかけにして考えたことをあげてみた。冒頭でも記したとおり、大きな変化を迎えようとしているとはいえ、実際にはまだ変化の前夜であって、わからないことだらけである。たとえば、「もし電子的な形での出版ができるようになったら、本を作る際の原価がぐっと安くなるはずだから、今では成り立たないような企画でも本として出すことができるようになるの?」と著者から相談があったとしても、とっさに返答をできるだけの見通しが筆者にはまだない。

遠からず実際に仕事の場で本の電子化に直面すれば、もっと具体的な方策をとっていくことになるだろうし、現実の中でさまざまな制約も出てくるだろう。ただ、現段階では、多分に希望も含めて、初心を忘れないよう、以上のようなことを目指す方向として記しておきたい。

大学出版部 ニューズ

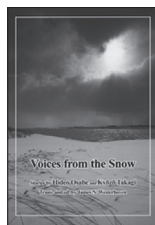
- 一月二九日の二〇〇九年度第五回常任理事会で、協会ウェブサイトのリニューアル案が公開された。加盟出版部の新刊が紹介されるトップページは迫力のあるもの、本開設が楽しみである。
- 大学出版部協会「新刊図書目録二〇〇九」及び「総合図書目録二〇一〇」が完成した、総合図書目録は、今年も壮観な出来上がりである。この目録と協会ウェブサイトの新刊紹介が連動することにより、読者への露出度が高まることを期待したい。
- 常任理事会後、恒例の「出版五団体合同新年会」がホテルメトロポリタンエドモントで開催された。大学出版部協会からは二〇校二五名が参加した。
- 東京堂書店神田本店において大学出版部協会ブックフェアが開催されている。第一弾は慶應義塾大学出版会の全点フェア。続いて北海道、九州両大学出版会のフェアが続く、それぞれにイベントが組まれる。二カ月サイクルで二年間にわたり、協会加盟全出版部のフェアが開催されるというロングラン。協会関係者は是非足を運んで頂きたい。

北海道大学出版会

- ▼ 榊田久代編著『初期アメリカの連邦構造―内陸開発政策と州主権』（A5判・四七二五円）憲法体制が定着し始めたジエファソン政権からモンロー政権に至る内陸開発政策の形成を分析。一九世紀初期のアメリカの連邦構造を明らかにする。
- ▼ 倉田聡著『社会保険の構造分析―社会保障における「連帯」のかたち』（A5判・五二五〇円）社会保険制度概念の探求と豊富化を目指した著者の集大成。〈北海道大学大学院法学研究科研究選書〉
- ▼ 岩下明裕編著『日本の国境・いかにこの「呪縛」を解くか』（A5判・一六八〇円）国境問題は、北方領土や竹島などの領土問題以外にも、国内的な離島問題、海洋問題、地方自治の問題など様々な論点を持つ。〈スラブ・ユーラシア叢書8〉
- ▼ 阿部周一編著『サケ学入門―自然史・水産・文化』（A5判・三一五〇円）サケはなぜ回遊するのか？ 分布・生態から資源・環境まで、サケの謎に迫る。
- ▼ 渡辺勝敏・高橋洋編著『淡水魚類地理の自然史―多様性と分化をめぐって』（A5判・三一五〇円）地理的変異に富む日本産淡水魚類の進化史を探求する。

弘前大学出版会

- ▼ 『Voices from the Snow』James N. Westerhoven 編訳（A5判・二八五頁・定価二六二五円）青森県を代表する作家長部日出雄氏と高木恭造氏の代表作を英訳した。編者による英文エッセーと共にカラー写真三七点を収録し、津軽の民俗（三味線・イタコ等）を紹介する『The TSUGARU』の一冊。



- ▼ 『校長日記 養護学校 365days―もっと知ってほしい、みんなのこと』安藤房治著（A5判・二〇四頁・定価一六八〇円）二〇〇六年の初版以来ご好評を頂いておりましたが、満を持して増刷しました。読めば養護学校を「もっと知りたく」なります。



東北大学出版会

▼クリストファー・ドッド著／榊原章浩
訳『世界漕艇物語』（A5判・四五六頁・
四七二五円）

人類とボートとのつながりは、太古の時代まで遡る。艇子の原理によるオールは、車輪が登場するまでの人類最大の発明であり、二一世紀の今もボートは重要な輸送手段となっている。競技としての飛躍的發展や、世界各地の歴史・地誌・文化など、ボートに関するあらゆる事柄を網羅。ボートの素晴らしさを美しい物語風につづる、漕艇ファン必読の一冊。

▼山下文男著『太平洋戦争史秘録 隠された大震災』（四六判・二〇五頁・二一〇〇円）

太平洋戦争末期、軍需工場が集中する東海地方を襲った、死者千名を超える四回の大地震。勤労学生や疎開児童たちの悲劇は、政府や軍部の厳しい検閲により情報管理され、国民に知らされることはほとんどなかった。豊富な資料と緻密な取材をもとに、隠された大震災の真相と当時の地震学者たちのジレンマに迫る。「天災」である地震と「人災」である戦争を考える、もう一つの昭和史。

流通経済大学出版会

▼『企業間関係の構造―企業集団・系列・商社―』島田克美著（A5判上製・三六六頁・四四一〇円）

失われた日本経済の二十年、企業システムをめぐる議論は混迷を続けた。その中で本書は時流に流されずに企業間関係の論理を探り内実を分析している。企業集団においては独立企業をベースにした行動の相互性と集団性、系列においては企業の地位の上下に基づくパワー関係、商社においては商権形成行動とネットワーク統合戦略、これらこそ決定的に重要なパラパラの組織と捉えがちな議論の空白を埋める注目の一書。

▼『社会学は面白い！―初めて社会学を学ぶ人へ―』流通経済大学社会学部入門書編集委員会編（B5判・二八〇頁・一五七五円）

社会学を志す若者が減少している。さまざまな動機・学力・希望を抱いて入学してくる新入学生を対象に、社会学の面白さや有用性、さらには大学における学習や研究についてわかりやすく解説する。

聖学院大学出版会

▼ラインホルド・ニーバー著『ソーシヤルワークを支える宗教の視点』（高橋義文・西川淑子訳）二二〇〇円

「科学技術による工業化、都市化と情報化の波に翻弄されて、経済不況による凄まじい格差社会が到来した」。本書は現代の状況をも髣髴とさせる一九三〇年代のアメリカの時代状況を背景に書かれた。そこには社会福祉に対するあまりに理想主義的で、個人主義的で、感傷主義的な理解が広まり、社会福祉活動が機能しないという問題状況があったのである。

キリスト教社会学倫理を専門とするラインホルド・ニーバーは、アメリカの政治外交政策に大きな影響を与えたことはよく知られているが、初期の思想的な営みの中で本書が書かれたことはほとんど考慮されてこなかった。しかし本書が提示する本来の社会福祉の実現という主張の中には、「社会の経済的再編成」「社会組織再編」「社会の政治的な再編成」というニーバーの壮大な社会構想が見られる。本書はニーバーの重要な著作の翻訳とニーバーの専門家と社会福祉の専門家による解説により構成されている。

聖徳大学出版会

▼村井靖児著『音楽療法を語る―精神医学から見た音楽と心の関係―』（四六判・二八〇頁・二一〇〇円）音楽療法の第一人者である著者の、長年にわたる研究をベースにし、専門的でありながら一般の読者にもわかりやすい内容となっている。音楽療法は心身の病理に対してどのような効果をもたらすのか、音楽はなぜ心を癒すのか、心と音楽との関係を解き明かす。

▼森彪著『医における癒し―人間関係の形成のなから―』（四六判・二八〇頁・二一〇〇円）本書では小児科医の医療現場での経験をもとに、病氣と闘った人たちの実例が紹介され、著者との交流が描かれている。純粹な医学書ではなく、高度に発達した現代医学において人間的交流の必要性を強く訴えかけている。

▼高橋大海監修・Jソロイスト歌唱「親子で楽しむ唱歌集」（音楽CD・三四〇〇円）文部唱歌をはじめ、「春が来た」、「小さい秋みつけた」など文化庁「親子で歌いつこう日本の歌百選」にも選定された二三曲を含む全四二曲が収録されている。

麗澤大学出版会

▼伊東俊太郎著『伊東俊太郎著作集第四巻 比較科学史』（八一九〇円）ギリシア、アラビア、西欧、日本の科学を、文明交流のなかで考察した最初の著作『文明における科学』および比較科学史の論文、科学の社会的次元、「比較科学史再考」他を収録する。

▼ジェローム・バンデ編／服部英二・立木教夫監訳『地球との和解―人類と地球にはどんな未来があるのか』（三七八〇円）ユネスコ・シンポジウムの報告―われわれは、地球と人類を滅亡から救うために、今、何をなすべきか。地球環境問題の全てにわたり、各分野の第一人者が実証的に論述、解決策も明示する。

▼サンドラ・ヴァンダーマー著／目黒昭一郎訳『ブレイキング・スルー―カスター・フォーカスを実現するための実践的方法』（三九九〇円）新たなビジネス・モデルの設計図を提示する。



▼慶應義塾大学アート・センター編『瀧口修造1958―旅する眼差し』（五二五〇〇円）。一九五八年、美術評論家・詩人瀧口修造がヨーロッパを周遊した際に撮りためた一二〇〇点以上にもおよび写真から一八四点を精選して写真集に収録。「解説書」一冊、オリジナルプリント一点、ポスター一枚、「旅の手帖」（綾子夫人宛絵葉書）（いずれもファクシミリ）を特製ボックスに同封し、旅人となつた瀧口の「眼差し」を克明に再現。

▼井筒俊彦著『読むと書く―井筒俊彦工ツセイ集』（若松英輔編、六〇九〇円）。東洋思想と西洋思想との「対話」をつくり出そうとしていた世界的なイスラーム学者、言語学者である故井筒俊彦博士によるエッセイ七〇篇を収録。井筒俊彦入門に最適の一冊。

▼細谷雄一著『倫理的な戦争―トニー・ブレアの栄光と挫折』（二九四〇円）。戦争によって国境を越えた「正義」を実現することは許されるのか―欧米の間をつなぎ新しい国際秩序を構築しようとして挫折したブレアが直面した難題は、現在の日本に大きな示唆を与えてくれる。

慶應義塾大学出版会

▼慶應義塾大学アート・センター編『瀧口修造1958―旅する眼差し』（五二五〇〇円）。一九五八年、美術評論家・詩人瀧口修造がヨーロッパを周遊した際に撮りためた一二〇〇点以上にもおよび写真から一八四点を精選して写真集に収録。「解説書」一冊、オリジナルプリント一点、ポスター一枚、「旅の手帖」（綾子夫人宛絵葉書）（いずれもファクシミリ）を特製ボックスに同封し、旅人となつた瀧口の「眼差し」を克明に再現。

▼井筒俊彦著『読むと書く―井筒俊彦工ツセイ集』（若松英輔編、六〇九〇円）。東洋思想と西洋思想との「対話」をつくり出そうとしていた世界的なイスラーム学者、言語学者である故井筒俊彦博士によるエッセイ七〇篇を収録。井筒俊彦入門に最適の一冊。

▼細谷雄一著『倫理的な戦争―トニー・ブレアの栄光と挫折』（二九四〇円）。戦争によって国境を越えた「正義」を実現することは許されるのか―欧米の間をつなぎ新しい国際秩序を構築しようとして挫折したブレアが直面した難題は、現在の日本に大きな示唆を与えてくれる。

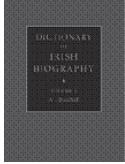
ケンブリッジ大学出版局

▼アイルランド人名事典全9巻セット
Dictionary of Irish Biography

From the Earliest Times to the Year
2002

(9780521633314 USD 1200)

Royal Irish Academyとの協力によってまとめられた『アイルランド人名事典』です。全9巻で構成され、芸術家、科学者、法律家、俳優、音楽家、作家、政治家、犯罪者、聖人を含む九〇〇〇人以上が取り上げられています。その中には、明治の文豪・日本研究者として知られる小泉八雲や、日本で生まれ、幼少期を日本で過ごしたアイルランドの詩人・翻訳・脚本家でもあるHelen Waddell、また、初代アイルランド大使のChristopher Fogartyの項目には、アイルランドと振興の深い皇后美智子様の記事が含まれています。各記述は、二〇〇語から一五〇〇語の興味深い要約から詳細な評価までと、様々な形で解説されています。



産業能率大学出版部

▼(学) 産業能率大学総合研究所編著
『マネジャーのための人事評価実践』
(二六八二五円)

現場第一線のマネジャーが正しい人事評価の方法を身に付け、さらに評価を通じて成果のあがる職場をつくっていくためのノウハウを習得することを目的とした実用書の決定版。

▼(学) 産業能率大学総合研究所編著
『研究開発マネジメントの強化書』
(二六八二五円)

本書では成果創出の鍵を握る研究開発のミドルマネジメントが、その機能を果たすために求められる基本的な視点と考え方・方法論について論じる。

▼庵里直見著／鈴木信市監修『結果を出す16の秘訣 使える！イチローのメンタルマネジメント』(二五七五円)

本書では、活躍し続けるイチロー選手の言葉の中から、珠玉の16の言葉を取り上げ、近年注目されているNLP(神経言語プログラミング)がベースである、目的指向型心理学を用いながら、彼の言葉に隠された考え(思考)を解き明かす。

専修大学出版局

▼林松国著『中国の産業集積における商業の役割』(A5判・二五二〇円) 高度成長を実現してきた中国の産業集積の発展は、外資系企業の進出に誘発されて形成されたものと、国内市場の急速な拡大を背景に地元資本の蓄積によって形成されたものがある。前者の代表は珠江デルタを中心とする華南地域のIT、家電、機械産業であり、後者は浙江省を中心とする華東地域のアパレル、繊維、雑貨などの産業である。本書は、中国の産業集積の形成発展における商人活動の役割、および専業市場の形成発展の実態を説明しようとしたものである。

▼専修大学文学部日本近現代史ゼミナール編『ゲイタイ世代が「軍事郵便」を読む』(新書判・七三五円) 本書は、本学近現代史のゼミ生らが二〇〇二年から軍事郵便の目録カードを作成して解説を続けている、その活動記録である。「戦没兵士のビルマ便り」という企画展示を催したり、さらに兵士の遺族を探して戦争当時の話を聞きに行き、専ら日常の連絡を携帯電話に頼る若い世代の戦争や手紙に対する思いを綴っている。

大正大学出版会

- ▼中村敬『子どもの健康と福祉』A5判・一五〇頁（予価一五〇〇円）。子育て支援の実践の場で活動する支援者のために、専門の小児科医の立場から「育児とは」「子育てにともなう親の心理的問題」「子どもとは」「子どものからだところの発達」などについて、「肩のこらない育児の勧め」をめざして、子育て支援のポイントを平易に解説する。
- ▼小嶋知善編『久保田正文著作選—文学的証言—』A5判・八八二〇円。作家・文芸評論家として著名な久保田の小説・短歌・評論・随筆などの重要著作を中心に収録する。
- ▼カール・ベッカー・弓山達也編『いのち 教育 スピリチュアリティ』A5判・二八三五円。「いのち」「教育」「スピリチュアリティ」をキーワードに、教育の現状とその可能性について、医療、教育学、宗教学等の立場から論述する。
- ▼野田文隆『マイノリティの精神医学—疾病・障害民族少数派を診つづけて—』A5判・五九八五円。一人の精神科医のするどい思考・批判・提言がこめられた一冊。

玉川大学出版部

- ▼近田政博著『学びのティップス—大学で鍛える思考法—』(A5判・二二六〇円) 大学での学習法や自ら学ぶ習慣をつけるコツを紹介する大学生活スタートガイド。名古屋大学版「新入生のためのスタディティップス」を元に一般向きに編集。
- ▼石原孝二・河野哲也編『科学技術倫理学の展開』(A5判・二五二〇円) 生命倫理、環境倫理、脳神経倫理……。科学技術倫理の各領域・トピックの展開に焦点をあてた論集。最近話題の分野を選び、実践のモデルを提示。最前線の一冊。
- ▼浜田栄夫編著『ベストロッチー・フレールと日本の近代教育』(A5判・五二五〇円) 戦後に至るまで日本の教育に強い影響力を与え続けてきた、ベストロッチーとフレールの教育思想がどのように受容され実践されてきたかを辿る。
- ▼ルース・アレン著／こだまともこ監訳／熊谷淳子・本間裕子訳『賞をとつた子どもの本—70の賞とその歴史—』(A5判・八四〇〇円) カーネギー、ニューベリー、コールドコットなど英語圏70の児童図書賞を考察する。沿革から受賞作のリスト、賞の背景までを詳細に分析。

中央大学出版部

- ▼深町英夫編『中国政治体制—100年—』(二六八〇円) 現代中国政治体制は、しばしば時事的関心の対象となるが、その歴史的背景が考慮されることは少ない。だが現在の体制は百年の模索を通じて生まれたものである。中国政治体制の過去・現在・未来を、七人の歴史・政治学者が多角的に分析する。
- ▼松田俊道著『聖カテリーナ修道院文書の歴史的研究』(一〇五〇〇円) 聖カテリーナ修道院所蔵のアラビア語古文書を駆使して描き出した中世エジプトのズインミー社会の研究。エジプトはアラブの征服後イスラームの支配に服した。ズインミーは社会の構成員であることが認められていた。ズインミー支配のあり方を描き出した好著。
- ▼奥本勝彦著『合併企業のマーケティング戦略』(二五二〇円) アジア地域の合併企業のマーケティング戦略を日系企業と欧米系企業を比較し、各戦略の細部に至るまで調査に基づいて分析を行っている。標準化と適応化が箱を縦に切つたものとする、本研究はその箱を横に切つたものといえよう。

東京大学出版会

▼宮島洋・西村周三・京極高宣編『**社会保障と経済**』(全三巻、各巻四二〇〇円) 医療、介護、年金、扶助、児童・障害福祉など社会保障の諸問題は、様々なメディアを通じて活発に議論が交わされているとおり、現在および将来の日本社会に重要な政策課題となっている。社会保障と経済社会の関係を総合的に網羅した学術書が未だに乏しい現状のなか、待望のシリーズといえよう。理論的かつ実証的に、国際比較や時系列分析も踏まえて、現在の日本社会と社会保障のあり方を総合的に浮き彫りにする。

「1 企業と労働」
「2 財政と所得保障」
「3 社会サービスと地域」
▼大内尉義・秋山弘子編集代表『**新老年学〔第三版〕**』(四〇〇〇〇円)
第二版刊行から一一年、超高齢社会に必携の定評ある大事典を全面改訂。従来の基礎生物学、老年医学、老年社会学に加え、新たに高齢者支援機器・技術を入れた四部構成である。最新老年学の知識と情報を集大成した、二二〇〇頁に及ぶ決定版。

東京電機大学出版局

▼E・ピリエリ他著『**MIMOワイヤレス通信**』(風間宏志監訳・五七七五円)
MIMO技術は無線通信システム設計におけるブレイクスルーであり、すでにいくつもの無線標準規格の中核技術となっている。本書はMIMO無線通信システムの解析と設計に関する詳しい入門書である。本分野を先導する専門家チームの執筆により、理論解析と物理的見識を融合すると共に、設計課題の重要な領域を明らかにしている。無線通信専攻およびシステムの開発者、研究者にとって有用な一冊となるだろう。

▼村木正芳著『**工学のためのVBAプログラミング起訴**』(二〇八頁・二二二〇円)
VBAは限られた時間でプログラミングの技法を習得する言語として最適である。プログラミングができるのと何ができるのかがわかればますます面白くなるだろう。本書では、まず基礎編として各種ステータメントとその使い方について解説した後、応用編として数値計算のための入門の課題を取り上げた。数値計算ではプログラムの流れの基になる数学的処理の考え方に力点を置いて執筆した。

東京農業大学出版会

▼『**横井時敬の足跡と熊本**』友田清彦 講述
東京農大の初代学長を務め「人物を畑に還す」をモットーに我が国の農業教育の創世記を築いた横井時敬は熊本の出身である。

横井時敬の農学志願に少なからず影響を与えたであろうと言われているのが『生産初歩』という明治六年の書物である。これは、横井時敬が学んだ熊本洋学校教師L・L・ジェーンズが熊本県からの求めに応じて農業政策を助言したことの記録である。今年はそのジェーンズの没後一〇〇年であることから、熊本ではこれを記念した事業が「熊本洋学校教師ジェーンズ没後一〇〇年の記念祭」としてとり行われた。

横井時敬は、四年間ジェーンズの教育を受けた後、駒場農学校に進んだわけであるが、熊本バンドに加わらず「生産初歩」に出会い、文明開化と同時に新しい農業(野菜、パン、農具、染料)に出会ったのである。

平成二十一年十二月／四六頁
八七頁／税込価格八八二円

東京農工大学出版会

▼「日本の人口問題と社会的現実 第一巻理論編 第二巻 モノグラフ篇」 若林敬子著 (A5判 第一巻・三六〇〇円 第二巻・三四〇〇円 (本体価格))

本書は、今年退官する筆者が、四〇年間にわたって行ってきた日本農村社会学、地域人口社会学の視点からの研究・調査を集大成したものである。

第一巻の理論編は、人口・農村・開発・意識・教育にまたがる分野を①少子・超高齢・人口減少社会を突き進む日本の将来②地域開発と人口移動、理由③社会開発とコミュニティ論④人口資質と年齢構造―教育、人口、学校統廃合、一八歳人口の縮小と外国人人口、高齢女性論⑤農村における学習、意識、農村生活、家・家族の変化―などテーマ別にまとめている。また第二巻のモノグラフ篇では、農山漁村の九地域について人口減少と限界集落に焦点を当ててまとめている。そのドラスチックな人口変動に地域崩壊していく厳しい実態が見て取れる。

法政大学出版局

▼J・ランシエール／梶田裕訳『感性的なもののパルターージュ』(二三一〇円) 政治的主体化と平等をめぐる現代の最も根源的な問いを、美的・感性論的な「分割」「共有」の思考を通じて解放する。

▼岡本哲志『港町のかたち』(三〇四五円) 日本各地の港町を訪ね、それぞれの歴史的形成と変容の過程を復元する。都市と水、人と水との関わりを描く「水と(まち)の物語」シリーズの第一弾。

▼有岡利幸『杉』(I・II、各二七三〇円) 「木の文化」の主役である杉の生態にはじまり、そのさまざまな活用法や文化的に持つ意味など、弥生時代以降の人びとの生活と杉との関わりを描き出す。

▼菅英輝編『冷戦史の再検討』(三九九〇円) 冷戦の終結から二〇年をへて、それがどのような歴史的過程と国際秩序の変容をともしつつ終結にたどり着いたのかを再考する、国際共同研究の成果。

▼D・R・ヘッドリク／塚原東吾ほか訳『情報時代の到来』(四〇九五円) 今日の情報革命の淵源を、一八世紀以降に開花した辞書編纂、地図や統計の作成、郵便や電信技術の発明などの歴史に探る。

武蔵野大学出版会

▼森田慎一郎著『社会人と学生のキャリア形成における専門性―今日的課題の心理学的検討―』(A5判・二二六頁・二六二五円) 長引く不況下に、キャリア形成は転換期を迎えている。本書では、人々のキャリア形成に重要な概念として、産業界と教育界に徹底し、学習によりだれもが獲得可能な「専門性」に着目し、キャリア形成とキャリア教育のあり方を調査と分析から実証的に明らかにする。キャリア・カウンセリングの基礎理論としても活用可能な研究成果である。



▼小西聖子著『ココロ医者、ホンを診る―本のカルテ10年分から』が第8回毎日書評賞を受賞。

▼五味政信著『学習者用ベトナム語辞典』(〜 Tu, Diên GOMI ~ Từ Điển Việt-Nhật - Từ Điển Học Tập dành cho mọi đối tượng) 二〇一〇年四月刊行予定。

武蔵野美術大学出版局

▼板屋緑・篠原規行監修『映像表現のプロセス』(B5判・一七六頁・DVD付・三八五円)

第一部では、武蔵野美術大学映像学科出身の映像作家5人自らが、在学中に制作した作品を素材に、その発想から独自のテクニクまで普段明かされることのない制作過程を詳細に語る。映像制作を「4つの作業過程」で捉えることを通して、ドラマ、ドキュメンタリー、CG+実写、モーショングラフィックデザイン、インスタレーションという、異なる映像ジャンルそれぞれの特徴や工夫とともに、ジャンルを超えた映像表現のプロセスの共通性が明らかに。

第二部では、岡川純子が映像メディア表現に必要な基礎知識を解説する。巻末には、厳選57タイトルを挙げた参考映像リストをはじめとする参考資料と用語解説を掲載。

付属する作例五作品を完全収録したDVDの実映像も加え、これらの豊富な情報を行き来することで映像メディア表現の理解を深めることができる、映像表現入門者必携の一冊。

明星大学出版部

▼算数科教育の研究

小野英夫

一四七〇円

◇算数・数学教育の沿革、目標、学習過程を概観する。

▼国語科教育入門―小学校教員を目指すために

長谷川清之

二一〇〇円

▼教育行政と学校経営―改正教育基本法下の公教育制度の理念と構造

樋口修資編著

二八三五円

▼現代教育課程入門―知識基盤社会を生きたるための学校教育を目指して

鯨井俊彦・青木秀雄・林幹夫

一六八〇円

▼第2版 教師論―教職とその背景

森下恭光編

一六八〇円

▼第3版 道徳教育の研究

森下恭光・佐々井利夫

一八九〇円

▼第2版 特別活動の展開

鯨井俊彦編

一五七五円

▼生涯学習概論

神山敬章・高島秀樹編

二六二五円

▼第2版 子どもの発達と環境―児童心理学序説

塚田紘一

二四一五円

関東学院大学出版会

▼関東学院大学キリスト教と文化研究所研究叢書1『バプテストの歴史的貢献』

バプテスト研究プロジェクト編(二五二〇円) 英国バプテストの日本伝道、日本におけるバプテスト派婦人宣教活動、同派の女性教育、日本基督教団残留バプテスト派研究など、未着手の歴史を解明。

▼関東学院大学キリスト教と文化研究所研究叢書2『バプテストの宣教と社会的貢献』バプテスト研究プロジェクト編(二五二〇円) 近代バプテストの宣教論を構築したフラー神学紹介、ロジャー・ウィリアムズの政教分離思想研究、日本で教育を通して宣教を進めたA・S・ズベルのバプテスト派独自の教育理念解明等。



東海大学出版会

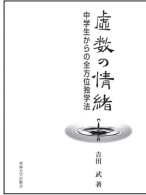
『数学美の世界を堪能する』

▼『新装版オイラーの贈物』吉田 武著（A5判・一八九〇円）

予備知識一切無用の完全独習書！数学の頂点に誘う迫力の五〇〇頁。ネイピア数、円周率、虚数、指数関数、三角関数が織りなす不思議の環、オイラーの公式の理解を目標に、数学の基礎を徹底解説。平明な記述は中高生の副読本としても好適な一冊。

▼『虚数の情緒』吉田 武者編（A5判・四五一五円）

その中心に数学を据え、人類文化の全体的把握をめざした科目分類に拘らない独習書。歴史、文化、数学、力学、原子、脳科学など多くの分野が、虚数を軸に、悠然たる筆致で書かれていく。漢字、電卓の積極活用など、他に例のない独特のものである。



名古屋大学出版会

▼池上俊一監修『原典イタリア・ルネサンス人文主義』（二五七五〇円）ヨーロッパ文化に息づくイタリア人文主義思潮の精髓を集めた空前の邦訳選集。

▼安富歩／深尾葉子編『満洲』の成立―森林の消尽と近代空間の形成―（七七七〇円）生態系から経済・政治まで、近代「満洲」社会をトータルに把握。

▼梶原義実著『国分寺瓦の研究―考古学からみた律令期生産組織の地方的展開―』（九九七五円）古代の瓦生産システムを全国的に把握。分布論を超えて、従来の国分寺瓦像を刷新する力作。

▼橋本伸也著『帝国・身分・学校―帝制期ロシアにおける教育の社会文化史―』（九四五〇円）社会文化史の視座からロシア帝国とその教育構造を浮き彫りに。

▼中西聡著『海の富豪の資本主義―北前船と日本の産業化―』（七九八〇円）近代に頂点を迎えた北前船商人の活躍を描き、日本の産業化に果たした役割を三す。

▼倉田徹著『中国返還後の香港―「小さな冷戦」と一国二制度の展開―』（五九八五円）香港は本当に中国に飲み込まれたのか。一国二制度の実像を解明。

三重大学出版会

▼『経度の発見―イギリス帝国と経度委員会』（仮題）石橋悠人著（A5判・二四九頁・定価一八九〇円）

はじめに 第1章 再発見された経度

第2章 経度の追求 第3章 科学組織としての経度委員会 第4章 経度と帝国

第5章 再編と解散 結論 文献一覽

▼『語り合う文学教育―子どもの中に文学は生まれる』藤原和好著（A5判・二二九頁・定価二一〇〇円）

二つの「お手紙」（語り合う文学教育）はどのようにして生まれたか、語り合う文学教育（教師にとつての意義）、文学作品との出会い―なぜ読みのマニュアルをつくらないのか―読み深め（虚構との出会い）、「感動は教えられない」か、「感じる力」を育てる 賢治作品と子どもとをどうつなぐか 状況を読む（心情主義を乗り越えるために）語り合う文学教育と説明文の指導

■第八回日本修士論文賞の募集を始めます。昨年度受賞者は、鄭方婷氏（東大院）、安藤裕子氏（早大院）でした。

京都大学学術出版会

▼DVDブック『カラコルム／花嫁の峰 チョゴリザー』フィールド科学のバイオニアたち」梅棹忠夫監修（三九九〇円）学問と冒険とが結びついていた時代。学術探検『カラコルム』（一九五六）と、未踏峰征服『花嫁の峰 チョゴリザ』（一九五九）——戦後日本を熱狂させた記録映画2本をDVD化し、フィールド研究を開拓した人のスピリットを、当事者と研究者が語る。

▼『集団―人類社会の進化』河合香史編（四二〇〇円）ベア／家族から民族／国家まで、ヒトはなぜ「集まる」のか？ 集団形成における暴力と誘惑の役割、「見えない仲間」を描き出す表象作用、構造化された社会の中に潜む非構造等、集団のメカニズムを進化の中で解く。

▼ダムと環境の科学Ⅰ『ダム下流生態系』池淵周一編著（三九九〇円）ダムは本当に悪者か？ もっぱら土木技術として捉えられてきたダムを、河川物理と生態学から見直し、治水と環境の調和を図る画期的試み。第1巻ではダム下流への影響について詳しく考察。環境の改善のための技術も紹介。

大阪経済法科大学出版部

▼藤本和貴夫・宋在穆共編『21世紀の東アジア―平和・安定・共生―』（三月刊行予定／予価二六二五円）

東アジア国際シンポジウムの報告論文を翻訳・編集。

第一部 平和と安全保障

東北アジアにおける安全保障―ジレンマに対する中国の取り組み（范士明）／朝鮮半島と北東アジアにおける恒久平和の構築（ケネス・キノネス）／北東アジアの安全保障と日本の平和憲法（澤野義二）／他4編

第二部 持続可能な経済発展と環境保全

大量生産・大量消費型経済発展のもたらすもの―中国繊維産業を例に―（辻美代）／韓半島における南北経済協力の過程と展望（梁官洙）／環境問題にどう取り組むか―水問題を例として（中尾正義）／他3編

第三部 国際移住と共生社会

外国人労働者の選別的受入れが進む日本（鈴木江理子）／中国朝鮮族の移住労働―構造と問題点（鄭雅英）／「国民」幻想と移住者の人間不安―日本の事例（武者小路公秀）／他1編

大阪大学出版会

▼濱川圭弘／太和田善久編著『阪大リーブル(18) 太陽光が育む地球のエネルギ―』（二三三頁・並製・一六八〇円）

▼天野文雄著『阪大リーブル(19) 能苑遺遙（下）能の歴史を歩く』（三五〇頁・並製・二二〇五円）

▼大阪大学コミュニケーションデザイン・センター編『ロボット演劇』（A4変形・並製・八〇頁・一五七五円）

▼西條辰義／新澤秀則／明日香壽川／石尹彦／戒能一成／鮎川ゆりか／本郷尚著『シリーズ環境リスクマネジメント4 地球温暖化の経済学』（四六判・並製・二六〇頁・二一〇〇円）

▼清文章著『古墳時代の埋葬原理と親族構造』B5判・上製箱入・三一二頁・六三〇〇円）

▼出原隆俊著『異説・日本近代文学』（A5判・上製・三一二頁・三七八〇円）

▼吉村大樹／エルタザロフ著『ウズベク語文法・会話入門』（B5変形・並製・二二六頁・二九四〇円）

関西大学出版部

- ▼野村幸正著『熟達心理学の構想』（四六判・三一五〇円）認知科学者である筆者が、インド心理学や仏像彫刻の内部観測・省察と認知科学の知見などを通じて、身体・行為の復権を目指す。
- ▼岡田忠克著『転換期における福祉国家』（A5判・二七三〇円）英国行政改革と福祉政策実践を通じて福祉国家の将来を展望する。一九八〇年代から九〇年代までの政治理念と展開が福祉政策に与えた影響を論究する。
- ▼オリビエ・トレス著／亀井克之訳『ワイン・ウォーズ・モンダヴィ事件』（A5判・三二五五円）マクドナルド化するワイン。米国モンダヴィ社の仏南西部地区への進出失敗を題材に描かれる米国流グローバルゼーションとフランス流地域主義との対立の構図。
- ▼陶 徳民編著『内藤湖南と清人書画』（A4判・五七七五円）東洋史学者であり、著名なジャーナリスト、一流の書家でもある内藤湖南の収蔵品を紹介。稀少価値のある数々の中から、内藤湖南の中国人脈と書画嗜好を解説。

関西学院大学出版会

新刊

- ▼岡本 卓也 著
『集団間関係の測定に関する社会心理学的研究』（A5上製・一九〇頁・定価三一五〇円）
- ▼前田 浩美・長尾 真理 著
『続・子どもに教える大人が初歩から学ぶ英語』（B5並製・一六〇頁・定価二四一五円）
- ▼杉浦 司 著
『ITマネジメント―モデリングと情報処理によるビジネス革新』（A5並製・一八八頁・定価一九九五円）
- ▼山内 一郎 著
『輝く自由―関西学院の教育的使命』（A5並製・三四八頁・定価一八九〇円）
- ▼磯貝 暁成 著
『改訂新版 関西学院初等部のめざすもの―見えないものに心を傾け、夢を育む学校』（A5並製・一〇六頁・定価八九三円）
- ▼重松 健人著
『言語と「期待」―意味と他者をめぐる哲学講義』（A5並製・二五二頁・定価二二二〇円）

九州大学出版会

- ▼上利政彦訳注『トテル詩選集 歌とソネット 1557』（菊判・六九三〇円）ヘンリー八世治下に出版された英国最初の名歌集に歴史的解説と原文・注釈を付し、本邦初の全訳をもって紹介する。
- ▼K・ダンカン・ジョーンズ著／小塩・川井・土岐・根岸訳『廷臣詩人サー・フイリッパ・シドニー』（A5判・五八八〇円）エリザベス一世の宮廷で文武両道の華・理想の廷臣とされてきたシドニーの実像に迫り、その非神話化を試みる。
- ▼今井航『中国近代における六・三・三制の導入過程』（A5判・七一四〇円）日本に先駆けて六・三・三制を導入した一九二二年制定の壬戌学制の解明と再評価。
- ▼プリントン、トラウゴット著／日野資成訳『語彙化と言語変化』（A5判・六三〇〇円）文法化と語彙化の類似点・相違点を明確にした上で、英語における語彙化の具体例を提示する。
- ▼九大アジア叢書 第14巻 山下昇・巽敏編著『変容する中国の労働法―「世界の工場」のワーカールール』（新書判・一〇五〇円）。

一般社団法人 大学出版部協会賛助会員

【50音順】2010年2月28日現在

株式会社朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
垂細垂印刷株式会社	〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154
株式会社アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408
尼崎印刷株式会社	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
王子製紙株式会社	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
株式会社大森印刷	〒105-0003 東京都港区西新橋3-17-1
岡本出版発送株式会社	〒353-0001 埼玉県志木市上宗岡3-16-2
カクタス・ジャパン株式会社	〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町2-1-1 アスパ日本橋オフィス
城島印刷株式会社	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
株式会社京都学術振興会	〒605-0009 京都府京都市東山区大橋町88-1 辻野ビル2F-A
株式会社クイックス東京	〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-13 ニュー原鉄ビル5F
港北出版印刷株式会社	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
三松堂印刷株式会社	〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階
三美印刷株式会社	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8
三立工芸株式会社	〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F
三和印刷株式会社	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井薬師堂1822-1
信濃印刷株式会社	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
新日本印刷株式会社	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342
株式会社鈴木製本所	〒112-0014 東京都文京区関口1-17-5
大同印刷株式会社	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
ダイニック株式会社	〒105-0012 東京都港区芝大門1-3-4 ダイニックビル7F
株式会社太洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1
株式会社竹尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6
土山印刷株式会社	〒601-8308 京都府京都市南区吉祥院向田東町7
宗教法人天然寺	〒204-0021 東京都清瀬市元町1-4-5-711
株式会社東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
株式会社とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座8-11-11
株式会社日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-9-5
萩原印刷株式会社	〒112-0004 東京都文京区後楽2-21-12
株式会社博報堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー 6F
株式会社平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7
宗教法人法界寺	〒287-0003 千葉県香取市佐原イ-1057
株式会社堀内印刷所	〒335-0034 埼玉県戸田市笹目3-11-5
株式会社毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
株式会社遊文舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31
株式会社読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1
株式会社ライトコミュニケーション	〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町28-5 吉元ビル4F
渡辺印刷株式会社	〒152-0031 東京都目黒区中根2-7-1

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同下さり、ご支援頂いている各社様をご紹介させていただきます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

●広告掲載出版社一覧（掲載順）

岩波書店	〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
みすず書房	〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21
未来社	〒112-0002 東京都文京区小石川3-7-2
ミネルヴァ書房	〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1

一般社団法人大学出版部協会 加盟出版部一覧

北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町1番地 弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市長平畑1-20
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-60-1165

聖学院大学出版会

〒362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

麗澤大学出版会

〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 04-7173-3320 FAX 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

ケンブリッジ大学出版局

〒101-0054 千代田区神田錦町1-10-1 サクラビル1階
TEL 03-3291-4068 FAX 03-3219-7182

産業能率大学出版部

〒100-0005 千代田区丸の内1-7-12 サビアタワー9階
TEL 03-6266-2400 FAX 03-3211-1400

専修大学出版局

〒214-0033 川崎市多摩区東三田2-1-2 専修大学購買会別館2階
TEL 044-911-7179 FAX 044-911-1382

大正大学出版会

〒170-8470 豊島区西巢鴨3-20-1
TEL 03-5394-3026 FAX 03-5394-3038

玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

東京大学出版会

〒113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局

〒101-8457 千代田区神田錦町2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会

〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

東京農工大学出版会

〒183-8509 府中市幸町3-5-8 東京農工大学内
TEL 0423-67-6700 FAX 0423-67-6700

法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北3-2-7 法政大学一〇口坂校舎内
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町1-1-20 武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

武蔵野美術大学出版局

〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

明星大学出版部

〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

関東学院大学出版会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-7164 FAX 045-786-9898

東海大学出版会

〒257-0003 秦野市南矢名3-10-35 東海大学同窓会館3階
TEL 0463-79-3921 FAX 0463-69-5087

名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市中千種区不老町1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

三重大学出版会

〒514-8507 津市栗真町屋町1577 三重大学図書館3階
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

京都大学学術出版会

〒606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部

〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-8211 FAX 072-941-9979

大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘2-7 大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1617

関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-5233 FAX 0798-53-9592

九州大学出版会

〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172